

— 随 想 —

なみちちゃんと「はかせ」

八 木 三 男

一、「人間」

なみちゃんは小学三年で庭越しの隣家の長女である。わたくしのメール友だちだ。弟がふたりいる。両方とも幼稚園。なみちゃんの家はわが家の裏道に面しているから、裏木戸を通して遊びにくる。子どもたちは玄関からではなく、縁側から家にあがる。弟たちは鉤かぎの手になった比較的長い縁側をすぐ走りだす。

なみちゃんは手足がのびのびした細身の利発な美少女である。もの静かでおっとりしている。弟たちがいつもくっついて歩く。彼女は弟を呼び捨てにする。弟たちはまるで家来である。

ある日、めずらしく彼女はひとりだったが、妻から

オリガミを教わっていた。なかなかきちんとした正確な作業ぶりだそうである。妻がいった。「中学の文化祭で教えた生徒たちのなん人かはなみちゃんに及ばない」

ある日彼女からメールが入った。「はかせへ、人間にはどうして間という字がはいっているの。こんどおしえてね。なみより」

わたくしは一瞬ドキツとした。いままでこんな質問に出会ったことがないな、わたくしも大人になるまで疑問に感じなかったし、いつの間にかその問題を解決していたな。なみちゃんは偉いなと思った。「こんな質問するなんてなみちゃんはえらいね。お寺さんおつぎやうでおしやか様をおがむでしょう、あの仏教で人間の世界を

『人間』と書いていたんだよ。いまでは『世間』^{せけん}というだろう、それと同じこと。だんだんと『人間の世界』の人を人間というようになったのだと思う。中国の古い言葉もそうみたい。人間というときは、『ひと』というのと違って、人格や個性^{こせい}があることをいうのだよ。個性や人格についてはお父さんに聞いてね」

個性や人格については逃げたが、「ひと」と「人間」の関係は日常語としては複雑だ。恋人から「あなたいいひとね」といわれれば、いい気分になるが、「いい人間ね」ではバカにされたように感じる。「人間的行為」「人間味」といって「ひと」は使わない。「ひとだから」や「ひとごみ」には人格や個性はないし、生物学的には「ひと」というから、大体こんなものでよかったのではないだろうか。再質問はなかった。

まえに、「ボケるとはどういうことか」と質問されて、とつさのことだったからいい加減に答えて、わたくしは悔やんでいたのだった。だから、わからないことがあつたら質問してね。知らないことは調べて答えるからね、となみちゃんにはいつてあるのである。

ここで「はかせ」について説明しておこう。なみちゃんの家族はみんながわたくしを「はかせ」と呼ぶ。

パパが妻の元同僚で、ママが妻の教え子の関係で妻が「せんせい」である。妻とわたくしを区別してどう呼ぶかを家族で協議して決めたものであろう。いろいろなことを知っているという意味らしい。孫でもない子たちから「じいちゃん」と呼ばれるよりはアダ名のほうがましかと「ニセはかせ」は思っている。

二、「謝肉祭」

またある日、なみちゃんからメールがあつた。「謝肉祭はどういういみなの。今習っている曲でそうゆう曲があるの。はっぴようかいでひくんだよ。なみより」

なみちゃんはピアノを弾く。わたくしは音楽は不案内だから、音楽の「謝肉祭」にはふれない。

問題は「謝肉祭」をなみちゃんにどう説明するかである。「謝肉祭」はほぼ知っているから、こんどはきちんと正確に説明しよう。それにしても、宗教と関連する問題を子どもに説明するのはかなり厄介だ、謝肉祭はいいとして、それにつづく一連の四旬節(Quint)や復活祭(Easter)をどう説明するか、なかでも「復活」はキリスト信仰の精髓であり、主が甦って生きているという告知はキリスト教会の出発点であり、世界宣教

の開始でもあった。もしそれについて質問されたらどうしようと思った。いわゆる聖霊の顕現はエリアードによると仏教にもあり、宗教史では比較的知られているテーマである。もし、宗教の問題になれば避けては通れないと思った。念のためにわたくしはウルヘルム・ブーセの『イエス』（林達夫訳、岩波文庫）の最終章とミルチア・エリアードの『世界宗教史Ⅱ』（島田裕巳他訳、筑摩書房）の『教会の誕生』のところを読み返してみた。

わたくしはなみちゃんに電話した。「説明するから、あしたにでもノートを持っていらつしやい」。早速なみちゃんは直ぐ下の弟をつれてやってきて、わたくしの机の隅っこでノートを広げた。以下にわたくしの「授業」の概略を書いたが、その間に書かれない手振り身振りやたくさんの方を費やしたのはいうまでもない。残念だったのは、カーニバルに関する手持ちの画像がないことだった。

「謝肉祭というのはカーニバルのことだよ。知ってる？」「リオのカーニバルならテレビで見たよ。女の人が裸で踊ってたよ」「リオって、どこの国か知ってる？」「知らない」。隣の書庫から弟に地球儀をもってこさせた。弟が地球儀を勢いよく回した。「こさ、ブラジル

だよ」

そのあと、世界に大きな宗教が三つあって、キリスト教にも考えの違いで大きく三つに分かれていることを、なみちゃんはノードに記していった。「カーニバルはカトリックの人たちがやっているんだよ」「うん」「その中心はローマだよ。イタリアのこさ」地球儀で示す。「カトリックなど知らないよね。大勢の前でおじいさんが白いマントのようなを着て、手を広げてバルコニーから挨拶しているのを見たことがあるかな。あれローマ法王というんだけど」「テレビで見たことがあるかも」そのあと、カトリックの世界的分布を地球儀で示す。「場所によって、お面かぶって仮装行列したりするけど、カーニバルは世界中どこでもやっているわけじゃないの。アメリカではカーニバルはあまりしないのね」

それからようやく謝肉祭の説明にはいった。四旬節であるイエスの荒野における断食については、とにかくそういうことがあって、カトリックではその間四〇日は肉を節制する習慣があり「その四旬節の前にね、肉をたらふく食っておこうということでカーニバルをやるのさ。酒を飲んで三日くらいドンチャン騒ぎをす

るの。肉に感謝するという意味だね」「ふーん、わかった」「カーニバルには肉を食うと意味があるのね*。肉食動物という英語もカーニバルに似た言葉だよ」

* 辞書を見ると、カーニバルの語源はギリシヤ語で肉を食わない意味らしい。それが逆の意味になったものようだ。

肉を節制する四旬節が終わると「いよいよ復活祭、イースターだよ。大体四月くらいだよ」「イースターなら知ってるよ」なみちゃんが元気よくいった。わたくしはイースターってどういうこととはあえて聞かないことにした。「復活」は説明しなくて済んだ。今日はこのくらいにしておこう。「なみちゃんは偉いな。イースターのこともなんでも知ってるね」。弟は退屈まぎれに、地球儀をむやみやたらに回したり、書斎をうろついているし、わたくしも疲れてしまったのである。「わかった?」「うん、わかった」。彼女はうれしそうな笑顔を向けた。そして、「行こう」と弟を命令するように促すと、「ありがとう」もいわないで帰っていた。

三、「クレヨンしんちゃん」

早春のころだったとおもう。なみちゃん宛メールで

テレビのWOWOWで「ハリーポッターの『賢者の石』」をやるから見にいらつしやいといったら、直ぐ下の弟といっしょに熱心に見ていった。

今年の子どもの日に、今度は「ハリーポッター『秘密の部屋』」をさそった。ところが、テレビの番組を見てきたのだからアニメの「クレヨンしんちゃん」を見たいといって、弟と弁当とおやつ持参でやってきた。彼らは座卓のわきで正座して見ていた。ひきつづき「ハリーポッター」もどうぞといったが、どうしても帰るという。母親の話では、「クレヨン」と「ハリーポッター」のどちらかひとつを選ぶように話し合ったのだそうである。

あとで分かったことだが、昨年親が子どもに見せたくないテレビ番組として「クレヨンしんちゃん」がトップを占めていた。なんでも言葉づかいが乱暴すぎるというのである(日本PTA全国協議会六月一六日発表)。わたくしは無責任のようだがどちらも内容を知らないからその当否はわからない。なみちゃんは厄介な質問をしてくるが、本当は「クレヨンしんちゃん」のようなマンガアニメが好きなんだと思った。

(やぎ みつお:にいがた県民教育研究所長)